

瞬 き

尾形 節子

「専門的に保育にかかわろう」と漠然と思い始めたのは、大学に入ってからだと思う。それまで子どもとして育ち、育てられてきた私が、育てる側に回ろうとした時、非常に意識したのは「見ること」だった。ただ楽しく子どもとすごす幸せではなく、願いをもって子どもと在る喜びを選んだ。そのために、子どものありのままの姿を見、その背景を見、自分

自身を見ること、それらに莫大なエネルギーを注いだ。そして、「目を見開こう」とするあまり、「見る目」のない自分に愕然とした。「見る目」があると思う人への素直な賞賛とどうしようもない焦りが同時にあった。そして、「もっと見なければ」という思いに支配された。

ある時、ひとりの保護者が「子どもが幼稚園にいる間はホッとします。(自分の子どもの様子を)見ないですむから。家で、部屋の扉を閉めて、ヘッドホーンをして、ピアノを弾きまくる時があるんです」と言った。とっさに頭に浮かんだ映像は、我が子の存在を否定している親の姿であり、否定されている子どもの姿であった。「子どもから目をそらさない強さが欲しい」と願わずにはいられなかった。しかし、言わなかった。その人が身を削るようになって子育てをしていることを知っていたから、言えなかった。

その子どもには、「もしかしたら何らかの課題を抱えているのではないか」と育てる側の人間に思わせる「何か」があった。「簡潔にポイントのみを言う」「言葉ではなくイラストを描き合って会話をする」等の意図的なかかわり方が有効で、マンツーマンでつきあう必要性を強く実感した。しかし、園内

に余剰人員はなく、教職員一丸となつての連携で乗り切るのが精一杯であった。その子の抱える「何か」を知るために、関連領域の大学教授に意見を求めたり、参観者(幼稚園・保育園・養護学校教師)とのかかわりを見たり、園内研究で話し合ったり、と思いつく限り試みた。保護者も私自身も、診断的な結果を必要としていた。しかし、それは得られなかった。一保育者として三十数名の子ども達という学級集団の中でその子との日々を重ねる決意を新たにするばかりであった。

担任としてその子どもと向き合うなかで「他の子どもに対する場合よりも明確に喜怒哀楽を表す方が伝わりやすい」ということがはつきりしました頃、私の疲労はピークになった。その子にわかりやすい表現は、他の子どもには明確すぎるのである。「個に応じる」というのは、言葉にするときれいだが、現実的にはどろどろしている。「先生は、あの子の

方がかわいいの？（言い方がとても優しいよ）」「あの子は分からない子なの？（とても強い言い方だもの）」という子どもの心の中にわき起さる様々な問いに、繊細に対応していかなくてはならない。その問いは、子どもゆえに言葉では明確に表現されないことも多い。保育者としてどれだけ「目」を見開いていられるのか、なんだか自分の精神力次第な感じがした。

そんな時、他の教職員がその子どもと穏やかな時間をすごしてくれているとホッとする自分に気付いた。保育者を志した時の私であったなら、そういう自分を「後ろ向き」と評価したであろう。しかしその時、その子どもに対する教職員の理解は深く温かく、私は安心して他の子どもとの時間をすごすことができた。直接その子とかかわらない時間が、その子とかかわりたいと思う気持ちを育んだ。そしてやっと、「見ないですむから」「扉を開けて」と言っ

た保護者の発言の真意に思い至った。「見ないこと」は、「決してその存在を否定しない。ありのままの子を受け入れて、ともに生きていく」という保護者の決意の表れなのだ。

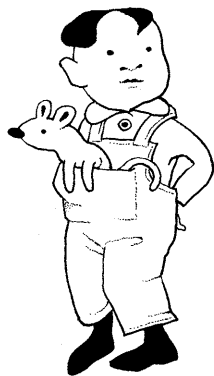
真っ直ぐにその子を見るためには見ない時間も必要で、保育の「目」を開くためにも、その「目」は閉じる必要があるのだ。そんな当たり前のことに、長い時間をかけて気が付いた。普段目を使う時、人は皆当たり前のように瞬きをする。瞬きをして目を潤している。保育の「目」も見開いているだけではダメなのだ。「目」を開いて、「目」を閉じて、「目」を開いて、そういう繰り返しのなかで、見えている部分と見えていない部分があることを自覚したい。「すべてを見ることが保育の答えではない」と実感することが大切なのだと思う。子どもを自分ひとりですてようと気負わず、誰かにゆだねること。それを「前向き」と思えるような信頼関係があること。

自分の知らない時をすごした子どもと新たな気持ちで出会うこと。当たり前のことなのだが、それらは一番大切なことなのだと思わなくてはならない。

出会うために、「目」を閉じたい。大切な人との一瞬一瞬、そこで、「会いたくてたまらない」と思っ「目」を開ける自分で在りたいと願う。

【追記】

最終的に私達（保護者と私）は、「その子どもについて）ADHDなのではないか」という判断に至り、専門病院に診断を仰いだ。受診を判断した時、その子の保護者は「これでやっと（育てにくい）理



由がはっきり分かると思うとホッとします。もう、

（育て方に）迷わなくていいと思うと嬉しい」と言い、私も心の中でそれに同意していた。その子の「何か」について、「症例に従って、迷わずかわってあげばいいんです」という臨床的な保証が欲しかったのだと思う。しかし、結果は「ADHDではない」というものであった。結局保証は得られなかったわけだが、私達の気持ちは意外なほどすっきりし、「このまま一日一日を積み重ねていこう」と再び思った。今にして思えば、結果がどうであれその子としっかり向き合っていくという毎日に変わりはなかったのだ。

「何か」に迷って「目」を閉じて、「それを知りたい」と思っ「目」を開けて、「ありのままの子を受け入れて、ともに生きていく」という決意を再確認する。それを繰り返す日々を重ねているのかもしれない。

（西東京市在住）